

意地悪な彼と不器用な彼女

目次

意地悪な彼と不器用な彼女

5

貴女と甘いコーヒーを

203

家族のかたち

247

意地悪な彼と不器用な彼女

「天さん、もしよかったら今度、私の家族に会ってもらえる？」

デートの帰り道、私、東雲ひかりは、付き合ってもうすぐ一年になる恋人の井坂天さんに尋ねた。けれどその瞬間、彼のにこやかだった表情が険しくなる。

「……それ、どういう意味で言ってる？」

「へ？」

彼のこんな不機嫌な顔を見たのも、私を突き離すような低い声を聞いたのも初めてで、驚いてしまっ。

それに、言われた意味もよくわからない。思わず立ち止まり、そのまま先へ進む彼を見た。

「家族に会えとか、萎える」

そう呟いて彼も足を止め、私を振り返る。

冷やかな笑顔の天さんは、今まで見てきた彼とは別人のよう。

五つ年上の彼は同じ部署の先輩で、私がここに配属されてからずっと傍で見えてきたはずなのに。

天さんは、営業部で二年以上成績トップを維持する、やり手の営業マンだ。笑顔が素敵で、女性

にも優しい。だから人気があつて、綺麗な彼女が途切れることのない人だった。

入社してからずっと、私はそんな彼に憧れと恋心を持っていた。だから、彼から告白された時はとても嬉しかった。

彼は忙しくてもまめに連絡をくれたし、デートにも誘ってくれる。喧嘩なんてしたこともなくて、二人で仲よく過ごしてきた。

だから、そろそろ親代わりの祖父母に彼氏ですって紹介したかっただけなのに。

「なんで俺がお前の家族に会わないといけなわけ？」

「付き合っている人を、家族に紹介するのがいけないの？」

「結婚したい女は、いつも似たようなことを言う。家族に会え、俺の親に会わせろ、って」

確かに、彼といつか結婚できたらいとは思っていた。でも、まだそこまで深く考えてなんていなかったのに。

「お前もそうだろ。結婚しろって俺に圧力かけてくるんだからな」

「そんなことしてないし、言ってもいないじゃない」

「お前も他の女と同じでがっかりだわ」

全然話を通じない。私の言葉を最後まで聞かずに、どんどん話していく天さんを、なんだか怖いと思つた。

「お前は文句も言わないし、いちいち詮索してこなくて楽だったけど、結婚するほどの女じゃねえよ。お前は、ただの遊び」

それは、私を好きじゃなかったってこと？

天さんはあざけるような笑みを浮かべて、言葉を吐き出し続ける。

「それに、お前よりいい女もいるし。いいタイミングだから、これっきりにしてくれ」

一方的にそう言い切り、天さんは私を置いていってしまった。

天さんに振られたことに気付いたのは、彼の後ろ姿が見えなくなってからだ。彼の豹変ぶりに、頭の中が真っ白になっていたらしい。

それからどうやって家に帰ったのかは覚えていない。

気付けば私は、自分の部屋のベッド端にしゃがみ込んで泣いていた。

振られたことよりも、彼の酷い言葉の方がずっとショックだった。

家にいる祖父母に悟られないように、声を押し殺して泣き続ける。

彼にとって私は本気の相手じゃなくて、そして自分が彼に女として好かれていなかったことが、悲しくてたまらなかった。

「あー、目が腫れてる……不細工だあ」

朝、洗面所で見自分の顔は酷かった。二重瞼が腫れて一重になっている。目元も赤くて、泣いていたのが丸わかりだ。

もう二十五歳だというのに、こんなに子供みたいに大泣きするなんて……

振られたのは現実だと、自分の顔を見て改めて思う。けれど、泣いたお蔭で頭はすっきりして

いた。

目を冷やしてどうにか瞼の腫れを引かせてから、着替えをすませる。それから、朝の日課にとりかかった。

それは、仏間にある御仏壇に五供を供えること。

どんなに体調が悪くても、それをしなかった日はない。

今日の花は、庭でほころび始めた白いマーガレット。母が大好きだった花だ。

供える花は、朝起きて一番に庭で水やりをする祖父が、花壇から選んで摘んできてくれる。

ご飯とお水は祖母が。

私はそれを持って、御仏壇にお供えするのだ。

日常礼拝を終えた後、両親と弟の位牌に挨拶をする。

三人が亡くなつて十五年、私はこれを祖父母に倣って毎日欠かさず続けている。

今日は、昨日の夜に自分が振られたという残念なお知らせを三人に告げなくてはならない。

悲しい気持ちが無くなったわけじゃないけど、泣いて冷静になった今、あれだけはっきり言われたのだからすっぱり諦めようと思えた。

「今日も一日、頑張ってください」

写真の中で笑っている三人にそう告げてリビングに向かえば、祖父がソファに腰をかけ、薬を飲むところだった。

「おじいちゃん、おはよう」

「ああ、ひかりか。おはよう」

「どこか痛い？ 大丈夫？」

テーブルの上にあるのは、いつも飲んでる薬とは違う頓服とんぷくの袋だ。慌てて顔を覗き込みながら尋ねれば、祖父は悪いことを見つけられた子供のように、バツが悪そうに笑った。

「少し頭痛がな」

「大丈夫？ 病院行く？」

「平気だよ。大したことはないし、朝の血圧も問題ないからすぐ治るよ」

「……そう？ 無理しないでね。続くようならすぐお医者さんで診てもらってね」

「ひかりは心配症だなあ。このジジイはそう簡単に病気に負けはせんぞ」

親指をぐつと立てて陽気に笑う祖父は、五年ほど前に軽い脳梗塞のうこうそくを起こしてからずっと薬を飲んでる。でも、病院嫌いでギリギリまで我慢するから心配なのよね。

「ひかりがお嫁にいくのも見たいし、曾孫ひまごも見たいから、まだまだ元気でいるぞ」

その言葉に、すごく胸が痛くなる。

「どうした、ひかり」

「ごめんね、おじいちゃん。私、付き合ってた人と別れちゃったの。だから、まだお嫁にもいけないんだ」

以前天さんとお付き合いをはじめたことを報告した時、祖父も祖母もとても喜んでくれた。

いつか彼に会えるのを楽しみにしていると書いていたのに……

結局、祖父母に合わせることもできないまま、私は振られてしまった。

とはいえ、態度を豹変ひょうへんさせた天さんの二面性を知った今では、紹介しなかったことはむしろよかったのかもしれない。

ただ、祖父母には残念な報告になってしまったのが申し訳なくて、自然と俯うつむいてしまう。

「そうか。それはそれで、ほっとしたよ」

「どうして？」

慰めではなく、本当にちよつと安心したような声で祖父が呟つぶやいたので、思わず顔を上げた。目が合うと、祖父が笑う。

「可愛い孫がお嫁にいったら、わしもばあさんもやつぱり淋しいからなあ……複雑なジジイ心だな」
そう言って、細く節くれだった手で、私の頭を撫でた。

昔から、私が落ち込んだり、悲しいことがあったりした時、祖父はこうして頭を撫でてくれる。

「ひかりが幸せなら、それが一番だな」

「やだ、おじいちゃん男前」

笑ってそう告げると、祖父は嬉しそうに目を細めた。

「そうやって笑っていると、たくさん幸せが来る。今日はいいことがあるよ」

「そうだね。ありがとう、おじいちゃん」

話をしていると、小柄な祖母がやってきた。

「あらあら、楽しそうね。でも、ひかり。電車の時間は大丈夫？」

腕時計を見れば、既に家を出る時間だった。

「電車に乗り遅れちゃう！」

慌てて立ちあがった私に、祖母がランチボックスの入ったバッグを渡してくれる。

「お弁当も忘れずにね」

「ありがとう、おばあちゃん」

「気をつけて行くんだぞ」

「はい。おじいちゃんも、調子悪かったらすぐ病院行ってね。それじゃあ、行ってきます」

電車に乗り遅れないように、私は小走りで家を出た。

私が勤める会社は中小企業だけれど、うちでしか作れない特殊部品を製造販売しているので、大手メーカーと取引が多い。

お蔭さまで会社の業績もよくて、社名こそさほど有名ではないものの、大都市に子会社を四社も抱えている。

私はそんな会社の、本社の営業部に勤めている。主な仕事は事務業務だ。

ちなみに、昨日別れた天さん……じゃなくて井坂さんも同じ部署だ。

同じ会社の同じ部署だから、彼に振られた翌日でも、朝からどうしても顔を合わせることになる。出社した私に、彼はなにごともしなかつたかのように「おはよう」と挨拶してきた。だから私も、同じくなにごともない感じで挨拶を返した。

そうしたら、彼はなんだか嫌な顔をしてその場から立ち去った。

「……井坂さんと喧嘩でもしたんですか？」

たまたま資料を取りに来た一つ年下の立木未紀君が、珍しく私的な話を振ってきた。

立木君は人の機微に敏感というか、目敏い。そして何故か私には遠慮がなくて、あまり触れてほしくないところをピンポイントで突いてくる人だ。

「あー、別れたの。というか、振られちゃった」

暗くならないように笑顔で事実を告げれば、資料を受け取った立木君の手がピクリと動く。

「へえ、やつとですか。よく一年も続きましたね」

「立木君は、毒舌だよー」

「ええ。俺、あの人嫌いなので」

淡々と立木君は答えた。彼は毎回、ストレートに井坂さんへの感情を口にする。

立木君と井坂さんはとても仲が悪い。犬猿の仲だと言えるだろう。

立木君がこの会社に入社した時、彼の指導担当になったのが井坂さんだった。けれど二人は反りが合わず、ことあるごとに言い争いをしていた。

井坂さんは仕事はとでもできるのだけれど、人を指導するのは苦手な人だった。そのせいで立木君はなかなか仕事を覚えることができず、二人の間には深い溝ができたのだ。

その険悪さは、私が立木君の指導役に変わるまで続いた。

今は立木君も井坂さんもお互い一定の距離を置いているので、あからさまに揉めることはなく

なっている。

そんな二人の不仲を知りつつも、立木君が入社する前からずっと井坂さんが好きだった私は、一年前に彼に告白され、それを受け入れたのだ。それ以降、立木君の私への態度も酷くそつげなくなっていた。

それはまあ、仕方ないと思っっている。

「別れて正解ですよ。書類、ありがとうございました」

「あ、うん。どういたしまして」

立木君はそのまま、自分の席へ戻っていく。

その日のお昼には、私が井坂さんと別れたという話が、何故だか会社全体に広まっていた。

いくら小さいとはいえ、隣接する工場の人たちにまで伝わっているなんて、一体どういうことだろう。

別に隠すつもりもなかったけど、この広がり方は井坂さんが女性にもてるとはいえ、異常だと思う。

「噂の出所、わかったぞ。経理の河崎。井坂の新しい彼女」

営業部の情報通である二課の男性社員が、食堂で食事をしていた私たちのテーブルにやって来た。

日替わりランチののったトレイを机に置きながら、私と峰さん——職場で私の隣の席の、頼れる

先輩女子社員だ——に教えてくれる。

ちなみに情報通の彼は、峰さんの旦那さん。旦那さんの方は、皆から孝正さんと呼ばれている。

孝正さんはもともと、私や峰さん、そして立木君と井坂さんと同じ、営業一課だった。でも昨年、

二課に異動になっている。

孝正さんは始業して一時間で噂を聞き、仕事の合間に出所を調べてくれたらしい。

流石、営業部で成績二位の、やり手セールスマン。行動も、情報収集も早い。

「昨日の今日でもう彼女？」

「しかも口が軽い女って、井坂が一番嫌いなタイプだろ？」

「どこかのお嬢様で、社長と繋がりもあるらしいって噂の子よね、河崎さんって。それなら、出世狙いかも。井坂は新人の頃から出世欲が強かったもんね」

新しい彼女って、井坂さんが私よりもいい女って言っていた人かな……

経理の河崎さんは、私の一つ年上で、社内でも有名な美人さんだ。社長の知り合いのお嬢さんだという噂もある。実家は資産家とか、どこかの企業の社長の娘とか、いろいろな話を聞くけど、本当かどうかはわからない。

女性として確かに魅力的な人だなと思うけど、もう付き合っているっていうのは、流石に早い気がする。もしかして私、二股されてたとか？ そう考えると、嫌な気分になる。

「いくら温厚なひかりちゃんだって、ここは怒っていいところよ？ 二股なら、井坂を一発くらい殴っても、みんな見逃してくれると思う」

峰さんに言われた。

「そうですね。今なら、頑張って叩ける気がします」

意気込みを込めて、胸の前でぐっと拳を握ってみる。

でも、人を叩いたことなんてないし、暴力的なことは無理かな……
怒ったりするのは苦手。けれど、二股されていたのならやっぱり許せない。叩くのは無理でも、一方的に言われっぱなしで振られた分も込めて、文句くらいなら言えるかも。

「え、そこ頑張るの？」

「そういうところ、ひかりちゃんらしくて好きよ。やる時は援護するからね」

「じゃあ、俺は奥さんの援護だな。任せろ」

峰さん夫婦が、揃って私に親指を立てて笑う。頼もしい支援に私も「お願いします」と、同じように親指を立てて返事をした。

「私に気持ちがないってはっきりわかったので、私もきっぱり諦めて新しい恋が探せます」

「それがいい。東雲ならすぐ見つかる」

「うん。案外近くに出会いがあるかもしれないし」

「そうですね」

峰さん夫婦はにこやかにそう励ましてくれた。

それから数日、なんだか生温かい周囲の目があったけれど、特に突っ込まれることはなく過ぎていた。

井坂さんとも、仕事以外で話をするとはなくなった。でも、特にぎくしゃくすることもなく、普段通りのままだ。

時々、井坂さんと河崎さんが仲よさそうに一緒にいる姿を見かけて、その度に多少は胸がズキツとした。それでも、嫉妬心は全く湧かなかった。

きつとそのうち、この胸の痛みも失恋の痕も、残さず綺麗に消えてなくなるんだろう。

そんなある日、就業中に私宛の外線が入った。

電話の相手は、祖父が通っている総合病院の看護師さんだ。祖父が診察待ちの途中で激しい頭痛を訴え、今、意識を失って検査中だという。

一瞬間が真っ白になった。

駄目だ。ちゃんと話を聞かないと。祖父のところに行かないと――

電話の向こうで、看護師さんが何か言っている。メモするためのペンは動いているのに、頭には残らない。

電話を切って、自分がメモした文字を目で追う。震えた字を何度見ても、何も頭に入っていない。

「ひかりちゃん、大丈夫？ 顔真っ青よ？」

「あ……峰さん……どうしよう、そ、祖父が、倒れて意識ないって……病院から」

「大変じゃない。課長に報告して……あ、課長！ ひかりちゃん早退しますす！」

「おお？ どうしたんだ。……って、おい東雲、大丈夫か？ すごい顔色だぞ。気分悪いのか？」

峰さんが隣で課長に事情を説明してくれている。

「東雲、早退後は後でいいから、早く病院行け。一人で行けるか？ タクシー呼ぶか？」

「はい、一人で……行けます。すみません、後お願いします」

なんとか最低限の仕事の引き継ぎをし、メモとバッグを持って椅子から立ち上がる。歩きだそうとしたけれど脚に力が入らなくて、ガクガク震えながら膝が折れた。

「危ない」

そのまま膝をつきそうになった時、私の腕を誰かが掴んだ。見上げれば、立木君だった。

「あ、ありがとう」

「落ちてみてください。貴女が動揺しても何も変わりませんよ」

私、動揺しているの？

立木君が私の手にあつたメモに視線を向けた。

「つつじ谷総合病院？　そこなら今から行く営業先の途中にあるので、送っていきますよ。このまま一人で歩かせたら、タクシー拾う前に道路にフラフラ飛び出して、貴女が事故に遭いそうですし」

「そうだな……。立木、頼めるか」

「ええ、大丈夫です」

「それなら頼むよ」

「ではいきますよ、東雲先輩」

気付いた時には、立木君が運転する車の中だった。

手には缶のアイスココアを持っていて、助手席に座っている。

ココアは半分くらい減っていた。

そのココアの缶を見て、立木君が新人の頃に仕事で失敗した時に「甘いものを取って気持ちを落ち着けよう」とこれと同じものを渡したことを思い出した。その時の私は、彼が甘いものが苦手だとは知らなくて、立木君が何も言わずにもものすごく苦々しい顔でそれを一気飲みしたのを、仕事の失敗がこたえてるのかな、なんて思いながら見ていたなあ……

「少し落ち着きましたか」

「……立木、君？」

隣を見れば、ちらりと視線だけを私に向けた立木君と目が合った。彼はすぐにまた、運転に集中する。

そっか、立木君が病院に送ってくれているんだった。

「さっきまで、俺が何を話しかけても『うん』しか言っていないませんでしたよ」

「あ……ごめんね。迷惑をかけて」

「どうせなら、ありがとうの方がいいですけど」

「ありがとう」

「別に構いませんよ、ついでなので」

運転しながら、立木君は淡々と答える。

「御家族は、病院に向かっていらっしゃるんですか？」

「祖母が、祖父に付き添って病院に行ってたみたい。だから一緒にいるって」

そういえば、おばあちゃんは大丈夫だろうか。祖父が倒れるのを間近で見ているはずだから、驚いて心臓の調子が悪くなっているといいけど。

「両両親は？」

「うち、両親いないの。交通事故で、両親と弟が亡くなったから」

「……すみません、立ち入ったことを」

「ううん、子供の頃のことだから、気にしないで」

「それじゃあ、おじい様が倒れたと聞いたら動揺しますよね」

「うん。自分でもびつくりするくらい、頭が真っ白になっちゃって……。部署の皆にも心配かけたよね。後で謝らないと」

「そうですね。でもとりあえず、今は自分のことだけ考えればいいですよ」

あれ、なんだか立木君が優しい言葉をくれるけど……。どうしたんだろう。

「あの病院、俺の身内が勤めているんです。いい医者が揃ってるって言ってたんで、東雲先輩のおじい様もきつと大丈夫ですよ。それに貴女のおじい様なら、不死鳥のように蘇りそうですし」

「流石に蘇るのは無理かなー」

でも、あれくらいの歳の人の中では、回復は早い方だと思うけどね。

「大事な人を悲しませるようなことはしないでしよう」

祖父のことをよく知らない立木君の言葉なのに、祖父のことを正しく言いあてていて、胸にすとんとその言葉が落ちてくる。

彼は気休めを言っただけなのかもしれない。けれど、祖父は大丈夫な気がしてきた。

「そうだよ。ありがとう……。今日の立木君、優しいね」

急速に気持ちが悪く落ちていて、つい口が滑った。

一年近く膠着していた立木君の態度が、以前のものに近くなって、気が緩んだと思う。「俺は気落ちしている人間の心を抉るほど、鬼でも悪魔でもありませんよ」

運転しながらずっと前を見ている立木君の横顔に、僅かに困ったような笑みが浮かんだ。

立木君が私の前で笑ったのを見たのは、一年ぶりくらいかも。

「うん、知ってる。立木君はもとから優しいよ。わかり辛いで」

そう答えたなら、立木君が驚いた顔をして、直後難しい顔になる。

「そういう恥ずかしいことを、よく平気で言えますね」

「え？ そう？」

「でもまあ、それだけ軽口が言えれば大丈夫ですね」

赤信号で停車した車内で、立木君は私に顔を向け、少しだけ頬を緩める。

それから数分ほどで、病院に到着した。

「送ってくれてありがとう」

「大変だと思いますが、無理し過ぎないでください」

「うん。立木君も仕事頑張ってるね」

立木君とは駐車場を別れ、メモを見つつ指示された場所に向かう。

辿り着いた先で看護師さんに声をかけると、祖父はまだ処置中で、もう少し時間がかかるという。祖母は心臓が苦しいと言って、処置室で休んでいた。けれど、祖父の処置が終わる頃には落ち着き、起き上がれるようになった。

祖父は、脳の中の血管が切れて出血していたらしい。幸い切れた血管が細く、また、早く処置を施したので、大事には至らなかつたそうだ。ちょうど病院へ来ていたことが、早い処置に繋がったとお医者さんから告げられた。

運が悪く出血が酷かつたり、処置が遅れたりしていれば、寝たきりになったり亡くなっていた可能性もあったと。

だから、不幸中の幸いだったらしい。

ただ、祖父は脳梗塞の既往歴があつて血が詰まりやすいので、血をサラサラにする薬を飲んでいゝる。出血を止めるには、その薬を止める方がいいのだけれど、薬を止めると血管が詰まる可能性が高危険だという。そのため、薬の量を調節しながら経過を見ないといけないらしい。

難しいことを他にもたくさん言われたけれど、医療用語が多過ぎてよくわからない。とりあえず、祖父はしばらく入院し、ベッドで安静にしているようにとのことだった。

会社へ連絡して、祖父が安定するまで私は変則勤務することに決まった。祖父の見舞いと仕事を両立していけるよう、上司が会社に話をつけてくれたのだ。



「東雲、これ、詳しい製品資料つけて、見積もりを今日の夕方までに作成して」
「え、ちょっと待ってください」

私の机の上に資料を置いてその場を去ろうとする井坂さん呼びとめた。
「煩わしそうに、井坂さんが私に向き直る。」

「なんだ？ 俺は忙しい」
「急ぎでしたら、他の方にお願ひして頂けませんか」

「はあ？ お前今まで、俺の書類は全部作成してただろ。何言つてんだ」

確かに、彼と付き合っていたほぼ一年、彼から依頼される書類のほとんどを私が請け負ってきた。期限が極端に短い案件も多かったけれど、私が断つたことは一度もない。

好きだったから、多少の無理もきいていたのだ。

もちろん他の人の書類も引き受けているし、彼だけを特別扱いしていたわけではない。

ただ、その頃は普通の勤務体制だったので問題なくこなせていたことが、今は難しい。祖父の入院と、それにもなう祖母の体調不良への対応。そのため出勤時間を遅らせたり早退したりと、勤務時間が短くなっている。これまでのように仕事が回せなくなっているのだ。

同僚の皆が助けてくれて、時間に余裕のある書類の作成を回してくれるから、どうにか今のところやりくりできている。

でも、今回井坂さんが持ってきたような至急の案件は、今の私では対応しきれない可能性がある。だから祖父の容態が安定するまで受けるのを控えるよう、上司にも言われているのだ。部署内の他の人ももちろん上司から話を聞いて、急ぎの書類は他の人にお願ひしてくれている。

けれど何度断つても、井坂さんはこうして以前と変わらずポンポンと無茶な仕事を持つてくるのをやめない。

「他の仕事で手一杯のため、他の方に——」

「口答えせずにお前がやれ。重役出勤に早退、お前、俺たちが営業であつちこち頭下げて回つてるつてのに、いい身分だよな？ それくらいやれよ」

酷く当たりがきつい言葉に、なんだか呆れてしまう。

もともと井坂さんは、嫌いな人間にはきつい言葉を投げかける人ではあつたけれど、流石にこれは酷い。

「間に合わない場合、責任がとれないです」

「うるさい。黙つて間に合わせろ」

「だから難しいんです」

「ちよつと、井坂君」

隣の席から峰さんが、彼に声をかける。

「ひかりちゃんは昼までに仕上げないといけない書類で手一杯だから、急ぎなら私がやるけど？」
綺麗な顔に笑みを浮かべて、峰さんがそう言う。けれど、井坂さんより十歳も年が上の峰さんに

対してさえ、彼は苦々しい顔を向けた。

「峰さんは黙つてもらえますか。俺はひかりに言つてるんで。ひかり、絶対お前がやれ。俺に振られた当てつけみたいに、俺の仕事を断るな」

「仕事に私情は挟みません」

井坂さんが舌打ちする。

「俺に振られたショックで凹んでる癖に、身内が病気だなんて嘘ついてるだろうが。仕事を平気でサボつて周りに心配されて。俺を悪者に仕立てて悲劇のヒロインぶりやがって。さぞ、気分がいいだろうな！」

事実と違い過ぎて、怒るどころか呆気に取られてしまう。

私の何を見て、井坂さんはそんな風を感じたのだろう。さっぱりわからない。

正直なところ、井坂さんと別れたことよりも今は祖父の方が気掛かりで、彼を意識する余裕もない。仕事も忙しいし、他のことに気を向けている場合じゃないのに。

ただ、この状態で彼の言葉を否定しても、会話がかみ合わないのはわかっている。だから、否定するのは止めておいた。

「井坂さん。私は家庭の事情で仕事を制限して皆さんに迷惑をかけているのを、申し訳なく思っています。その点はお詫びします。申し訳ありません。だからこそ、仕事で不備を出したくないんです。そこをご理解ください」

そう頭を下げれば、頭上から更に舌打ちが聞こえる。

「悪いと思うならやれ」

結局、井坂さんは聞く耳をもたずにそう言い捨てて、さっさと部署から出て行く。

顔を上げると、峰さんが隣で憤怒ふんぬの形相になっていた。

「なにあれ。感じ悪過ぎ」

「すみません」

「ひかりちゃんは何も悪くないじゃない。彼、あんなことを周囲に言いふらしているけど、誰も信じてないから、気にしないで」

「言いふらしている？」

「そう。井坂、ひかりちゃんと付き合っている頃から河崎さんと二股していたのが、すぐばれたじゃない？ 周囲から白い目で見られていたところに、ひかりちゃんが大変な状態になったでしょう？ ばつが悪かったのか知らないけど、ひかりちゃんへの悪態で自分の悪い話を消そうとしてるみたい」

「それは、逆効果な気が……」

井坂さんと河崎さんがずいぶん前から付き合っているという話は、私たちが別れた後で流れてきたんだよね。やつぱり二股だったけれど、彼への気持ちはそれで綺麗さっぱり消えたから、今更どうでもよかった。

あのまま、二股と気付かずする付き合うより、ずっとよかったと思うし。

「だよねえ。井坂の女癖の悪さは入社時から変わらないし、ひかりちゃんの真面目な仕事態度を

知っている人も多いから、誰も信じてなくて噂にもなっていないけど」

「課長が祖父のお見舞いに来てくださったし、嘘だったらとくにばれてますよね」

「課長も同じことを井坂に言ったしなて窘めていたわ……。しかし、あの態度は目に余る。後で課長が戻ったら報告しとくね」

一児の母で、会社では頼れるお姉さんの存在の峰さんが笑顔で宣言した。女の私でもドキドキしてしまう素敵な笑顔のほずなのに、峰さんの背後にブリザードが吹き荒れている気がする。

美人が怒ると、すごく怖い。

「あ、仕事一つ終わったから、何か一つ回してくれる？」

「いいんですか？」

「思ったより早く片付いちゃったから。それにひかりちゃんには、つわりが酷ひどかった時に助けてもらったしね。困った時はお互い様よ」

「ありがとうございます。助かります」

処理する書類の一つを渡すと、峰さんはパソコンに向き直った。

私も業務を再開する。

「それにしても井坂、もともと仕事外での評判がいい方じゃなかったけど、最近酷ひどいわねえ」

「そうなんですか？」

私は誰かの悪い話は、耳にしてもすぐに流してしまうので、あまり気にしたことがなかった。

画面に目を向け、指を動かしたまま二人で会話を続ける。

「ひかりちゃんと付き合い始めて人間も丸くなったし、女遊びもしなくなったから、真剣なんだって見直したけど……別れた途端、反動なのかなんなのか、前より傍若無人ぼうじやくふじんでどうしようもない。なんだか井坂の方が振られて嫌がらせしているみたい」

「まさか。私が振られたのに」

「気をつけた方がいいわ。ああいう下手にプライドの高い男は、自尊心を傷付けられると逆恨みさかみするから。立木君が被害者としてのいい例よ。悪化するようなら、すぐに課長か部長に伝えた方がいいわ」

「はい。そうします」

祖父の体調が回復すれば、仕事も通常の状態に戻せるはず。そうなればこれまで通り仕事を受けられるようになって、井坂さんも何も言わなくなるだろう。だからこのことを、私はそんなに難しく考えていなかった。



「ひかりちゃん、ご飯いける？」

「すみません。この資料、今日中に上げないといけなくて」

昼休憩のチャイムが鳴り、いつもお昼と一緒にとる峰さんが声をかけてくれた。

私の答えに、峰さんは不思議そうな顔をする。

「いつ頼まれたの、それ」

「今日の朝、井坂さんに至急と言われて」

「また？」

峰さんの眉間に少しだけ皺しわが寄る。

あれから更に三日が経った。井坂さんの書類依頼の無茶ぶりは、変わらないどころか、むしろ酷ひどくなっている。わざわざ人がいない時を狙って頼んでくる始末だ。

断つても強引に押しつけてくるし、課長に相談しても改まらなかったなので、もう私が自分で対応するしかない。

そのせいで仕事が全体的に押し、残業ができない今の私は、昼休憩を削って仕事時間を捻出するという方法をとっていた。

「まったく、井坂は。手伝えることある？」

峰さんがそう尋ねてくれるけれど、彼女も幾つか仕事を抱えているので申し訳ない。

「何とか間に合いそうなので、お昼を摘まみながらちやちやと片付けちゃいます」

「そう？ 少し顔色が悪いから、あまり無理しちゃ駄目よ？」

「はい。ありがとうございます」

峰さんが食堂に行くのを見送って、私はパソコン画面に向かう。

キーボードに手を添えたまま、深くため息をついた。

このところ、作業に集中できない。身体も酷ひどくだるい。

仕事で疲れているのに、夜眠れないのだ。

ベッドに入ってからあ寝ようとと思って、祖父や祖母のことが頭をよぎる。

祖父の意識は戻っているし、簡単な意思疎通も図れるようになった。けれど、まだ出血はじんわりと続いていて、予断を許さない。

祖母も連日のお見舞いで疲れているようで、横になっている時間が増えていた。

もし、祖父の脳の出血がそのまま止まらなかつたら……祖父がそのままよくならずに、祖母も心労で寝込んでしまったら……

縁起でもないことが頭の中をぐるぐるまわり、不安で全然眠れないのだ。

いつもの私なら、こんな悪循環に陥ることなどない。

けれど、今の状況は相当こたえているようで、マイナス思考が止まらない。

もし両親や弟が生きていてくれたら……いろいろ協力しながら、祖父母を支えられるのに……とか、どうしても考えてしまう。

自分が頑張ればどうにかなるって思っても、やっぱり私一人じゃままならないのだ。

一人っていると、自分らしくないネガティブな気持ちにばかりなる。

「あーもう、らしくなさ過ぎてやだなあ」

また気持ちが沈んで、慌てて頭を横に振る。

大丈夫。きっと祖父は回復する。現に、少しずつ調子もよくなっているもの。祖父も病院で頑張っているし、私は私のやれることをやらないとね。

まずは……

「仕事を片付けないとね」

気を取り直して、私はキーボードを叩き始める。

どのくらい集中していたのか……。缶のような瓶のような、しっかりとした容器が机に当たる音にふと我に返る。自分の机の左側に小さなビニール袋が置かれたのが目に入った。

目線を向ければ、立木君が難しい顔をして立っている。外回りから帰って来たようだ。

「あれ、立木君？ おかえり？」

「戻りました……すみません。何度か呼んだんですが、返事がなかったの」

「あ、ごめんね。集中してみた。外回りお疲れさま」

「それ、あげます」

立木君が指さしたのは、机の上に置かれたコンビニの袋だった。

どうしたんだろう、これ。

「コンビニで昼飯買ったら、くじ引かされたんです。それで当たったんですけど、俺苦手なんで」

私の疑問を感じ取ったのか、立木君が早口で言う。

袋の中を見れば、甘い味の缶コーヒーと、栄養ドリンクだった。

しかも、コーヒーは私が好きなメーカーの商品。

立木君はコーヒーはブラック派だ。甘いものは、食べ物でも飲み物でも苦手で、ほとんど口にしない。

「いいの？」

「処理に困ってたんで」

「ありがとう。ちょうどコーヒーほしかったんだ」

「疲れている時は、やっぱり甘いものが一番よね」

「よかったです。……ところで、昼飯は食べたんですか？」

「あ！ 忘れてた」

「摘まもうと思つてうっかり忘れてた」

「机の引き出しから、朝に買っておいだそうざい総菜パンを取り出す」

「食べて休まないよ、頭働かせんよ」

「だよ。ありがとう、休憩するね」

昔、私が新人指導の時に彼に言ったことをそのまま言われ、なんだかちよつと懐かしいなと思う。それに、彼に言われなかったらご飯を食べずに昼休憩の時間が終わっていたかも。

声をかけてもらえてよかった。

笑顔でお礼を言ったけど、立木君は更に険しい顔をしてさっさと自分の席へ戻って行った。

相変わらず立木君はそっけない。それでも、少し前に比べたら、話しかけてくれるようになったなあ。

祖父母のことも心配で、仕事も大変だけど、悪いことばかりじゃない。

立木君がくれたビニール袋から缶コーヒーを取り出して、それをぎゅっと握る。

今日、このコンビニで、私もパンを買ったからわかる。

この缶コーヒーは、くじの当たりの景品じゃない。

きつとわざわざ買ってきたんだと思う。わかり辛いけど、たぶんこれは差し入れ。

彼らしい気遣いに、沈んでいた気持ちが少し浮上する。

よし。これを飲んで、残りも頑張ろう。



それから数日が過ぎた時、問題が起こった。

「何なんだよこの書類！ 資料が違うじゃないか！ これから必要だつてのに、どうしてくれるんだ！」

昼休憩が終わった部署内に、井坂さんのものすごい怒声が響く。

私はそんな彼を前に、頭を下げていた。

「すみませんでした。すぐに直します」

頼まれた書類に添付する資料を、私が間違えていたらいいのだ。

らしいというのは、私は彼に渡された資料を依頼された通りにそのまま掲載しただけで、資料の内容を確認したわけではないからだ。その井坂さんから渡された資料自体が、実は間違っていたという。私はそれに気付かなかつた。

普段なら、資料の内容にも一応目を通すので、おかしいことに気がつくはずだった。けれど今回

は、気付くことができなかつた。

それは明らかな自分のミスだから、私は謝罪をした。

でもその後で、井坂さんのミスも率直に指摘したら「黙れ、言い訳するな！」と、余計に怒りを買ってしまったのだ。

このところの井坂さんの強引な振る舞いに辟易して、ついそのまま思ったことを口にしたのが気に障ったみたい。

「だいたいお前、俺が注意したのに早退も遅刻も直らねえし、たるみ過ぎだろ。いい加減、仕事をまじめにやれよ。こんな下らないミスしやがって」

誰が訂正しても、井坂さんの中で私の変則勤務は早退と遅刻らしい。それが気に入らない彼に、毎日のように文句を言われている。

無意識のうちに、私は自分の両手を強く握りしめていた。手に持っていた書類が、くしゃりと歪む人の心を折っていくかのような罵倒を、これ以上聞きたくなかつた。

「何とか言え！」

この傍若無人な井坂さんの振る舞いに、もう我慢できなかつた。

これまでの仕事の押しつけも含めて、一度、彼にははつきりと言っておこう。

そう決め口を開きかけた時、声が聞こえた。

「犬の無駄吠えかと思つたら、井坂さんですか」

「何だと、立木」

いつの間にか外回りから帰って来たらしい立木君が、井坂さんと私の傍に近付いてくる。

そして、井坂さんの持っていた書類を取り上げた。そこにある資料のページをめくると、今度は私の手から資料をとって井坂さんに向かつて見せる。

「これ、同じ資料ですよ。それと、東雲先輩が持っていた資料のここ、貴方の字で指示が書いてあります。これ、貴方の根本的ミスですよね？」

井坂さんは特徴的な字を書くので、彼の字だとすぐにわかる。

立木君の指摘に、井坂さんが彼を睨む。

「だとしても、それに気付かずに作ったこいつが悪いだろうが」

「東雲先輩がミスに気付けないほど、厳しい条件下の仕事を何件も重ねて彼女へ依頼したのは貴方でしょう？ しかも、手が回らないと断っているのに無理に仕事を押しつけているのを、何度も課長に注意されてきましたよね？ それでも止めないから、嫌がらせしていると営業一課の人間のほとんどは思っていますよ？」

立木君の言葉を証明するように、一課の社員の多くは井坂さんに厳しい目を向けていた。

「ふざけるな！俺は仕事が多いんだよ。顧客が少ないお前等みたいに余裕もってなんてできるか」

「へえ。このところ、営業に回らず女性と頻繁にホテルに入っているのを、何人かの社員が見えますよ？東雲先輩に頼んだ資料はどこで使っているんですか？」

「なっ……」

井坂さんの顔に朱がさす。彼は今にも立木君に殴りかかりそうな憤怒の表情を向けた。

衝撃的過ぎる立木君の言葉に、周囲もざわめく。

「お前っ、そんな嘘で俺を貶めようって言うのか」

「嘘なんて俺はつきません」

「証拠もないだろ！」

「証拠？ ご存知ないんですか？ その写真が添付され、時間と場所が書かれた社内メールが、かなりの人に送られていますよ？ 俺のところにもきていましたし」

周囲で、「あ、俺見た」とか、「俺のところにきた」とか囁く声（ささやくこゑ）が上がる。その全てが男性で、女性の声はない。男性限定で回っているの？

「う、嘘だ……」

「それから、貴方以外の課員皆、ご家族の入院で大変な思いをしている同僚に対して、さぼっているだの遊んでいるだのと悪態をつく常識知らずでもありません。彼女の仕事量は、勤務時間が減っているのほとんど変わってないんですよ？ 貴方が、要らない書類仕事を押しつけるせいで。課長が頭を抱えてましたよ」

え……私の仕事量、そんなに変わってなかったの？

無我夢中で処理していたから、全然気付かなかった。

「就業中に何をしている！」

突然、室内に厳しい一喝（いっかく）が響いた。声の主は我が社の社長だった。

六十代前半のナイスミドルな社長は、下町の工場に就職して、一代でこの会社を作り大きくした

すごい人だ。

驕（おご）ったところがなくて、社員が増えた今もこうして社内を回ったり、食堂で皆と同じように食事をしたりしている。だから、社員とも交流が多く、かなりの社員の名前と顔を把握しているのだ。

そんないつもはおだやかな社長だけど、今は怒っているようだ。

野次馬をしていた社員は、まずいと思ったのか一斉に自分の持ち場に戻っていく。

「しゃ、社長」

真っ赤だった井坂さんの顔が、一気に真っ青になる。

私は慌てて社長に頭を下げた。

「騒がしくして、申し訳ありません。仕事のことですこしトラブルが」

私と同じように、立木君も社長へ頭を下げる。

「東雲君、対処できそうか？」

「はい」

社長が平社員の私の名前を覚えていることに驚いたけれど、それを表に出してはいけない状況ということくらいはわかる。ピリピリした空気をまどつている社長の姿に、努めて動揺を出さないようにしつづ言葉を返した。

「ならば早急に対処を。それから……井坂天は今いるか？」

「は、はい。俺……私です」

「君に話がある。ついて来なさい」

そう言うって社長は、井坂さんを連れていった。

一気にいろいろなことがあって、もう何がなんだかわからない。

「大丈夫ですか、東雲先輩」

「うん。助けてくれてありがとう」

「別に助けてはいません。あの人に喧嘩を売っただけです」

確かに最初は、井坂さんに喧嘩を売ろうな言い方をしていたっけ。

でも、私の話を聞かずにどんどん捲し立てる井坂さんを、私では止められなかった。

課長や部長もちようど不在で、いつも助け船を出してくれる峰さんも、今日はお休みだ。

立木君が井坂さんを煽る言葉^{あお}を言わなければ、そのまま井坂さんの怒鳴る声を聞き続けなければならなかっただろう。

「それに、貴女もいい加減怒ったらどうですか。あんな理不尽なことを言わせっぱなしって、どうなんですか。貴女の優しい指摘なんて、あの人には通じませんよ。相手をつけあがらせるだけ。メリハリつけてピシッと怒るところは怒らないと、あんな嫌がらせを受けて貴女が損するだけです」

ああ、やっぱり井坂さんのあれは嫌がらせだったんだ。

要らない書類を作らせているとか、立木君が言っていたけど……それが本当なら、もう止めてほしい。

他の書類に不備が出て困るし、それに現時点ですでに周囲に、特に峰さんにかなり迷惑をかけているのだ。

「一度くらい、井坂さんを怒りに任せて殴つても、うちの部署の人間は見ないふりしてくれますよ」あれ、なんだかデジャヴが……峰さんにも似たようなことを言われた気がする。

「うーん。注意しようかなって思ったら、立木君がガツンと言ってくれたから。私の出番なし？」

「それは邪魔をすまませんでした」

「ううん。言いたいことは立木君が言ってくれたから、それで満足だもの。それに自分のミスはミスだから、今度から気をつけるよ」

「……東雲先輩は全然、怒らないですよね」

「んー。毎日を少しでも笑って過ごしたいし、人にも笑っていてほしいから。立木君も、笑顔だとイケメン度が更に上がるよ？」

負の感情は嫌なことを引き寄せるから、笑ってよいことを引き寄せなさい。幸せな姿は見ている人も自分も幸せにする、って祖父母が私に教えてくれて以来、私はそれを心がけている。

「要らないお世話です……貴方に怒れと諭すのは無理だとわかりました。諦めます」

そっけなく言われたけれど、ちよつとだけ顔が赤くなっているの、たぶん照れているのだろう。それにしても最近、なんだか立木君の顔が赤くなるのをよく見る気がするな。

「そういえば、どうして社長が？」

いらつしやる時は事前に連絡があることが多いのに、今日はそれがなかった。

「さあ。社長は俺がここに入った時には、既に廊下にいらつしやったので」

「立木君が入って来たのって……」

『何か言え』って言ってた後くらいですかね。ちなみに、『資料が違う！』って叫んでいるのを、社長の傍で聞いていました」

「ほ、ほぼ最初からだよ、それ」

「自業自得じごうじとくってやつですよ。大変ですね、井坂さん」

それって、立木君が言っていた井坂さんの悪い行動、全部社長に筒抜けってこと？

おお。立木君、策士？

キラキラした素敵な笑顔だけれど、怒ってるよね？ うん、すごく怒ってるのがわかる。

何でそんなに怒っているの？ 立木君。

そう聞きたいけれど、笑顔が怖くて聞けない。

でも、井坂さんと折り合いが悪くて、孝正さん情報では入社以来、陰ですつと嫌がらせを受けていたって話だから、思うところはいろいろあるのかもしれない。

「でもまあ俺もわざと煽あおつたんで、後で叱られそうですね、喧嘩両成敗で。でも、すつきりしました。社長に叱られても後悔ありません。それじゃ、これ返します」

立木君は、手に持っていたさっきの書類を私に渡して、そのまま自分の席へと帰っていった。

その後、井坂さんは社長からの嚴重注意を受けたらしく、私に過剰な仕事の依頼をしなくなった。勤務形態のことも何も言わなくなった。何か言いたそうに私を見ている時はあるけど、あまり快く思われていないのがわかる視線だったので、私から話しかけたりは一切していない。

そのお蔭か、仕事は忙しいけれど気持ち的に少し余裕がでてきた。

ちなみに立木君は、部長に呼び出されて注意を受けたそう。けれど形だけだったみたいだと私に教えてくれたのは、孝正さんだった。

立木君とはそれからぐつと親しくなる……ということはなく。けれど、孝正さんが何故だかよく、立木君の話を私にするようになった。

それから数日して、祖父は少し呂律ろれつが回らないところもあるけれど、喋しゃべれるまでに回復した。

ただ、まだじんわりと出血しているようなので、ベッドの上で安静にしていることが必要だと説明を受けた。

専門的なこともあれこれ言われたけれど、やっぱり私ではよくわからない。でもとりあえず、祖父と話ができるようになったのは大きな進歩だ。

「だから言っただろう？ わしは死なんぞー」

多少弱々しい感じもあるけど、祖父はいつもの明るさでベッドの横にいる祖母と私に笑顔で呟つぶやく。あまり元気のなかった祖母も、祖父の回復ふりが嬉しいのだろう。明るい表情で微笑んでいる。

「もう、おじいさん。ひかりが病院に行くように言ってくれたから、助かったんですよ」

「そうだな。孫の言うことは聞くもんだ」

「元気になってきてよかった」

「もう家に帰っちゃ駄目か？」

「まだまだ。先生の言うことちゃんと聞いて、しっかり治してからね」

「ひかりは厳しいなあ。なあ、ばあさん」

病院嫌いの祖父は、困ったように祖母に助けを求めるけれど、祖母は微笑んだまま首を横に振った。

「おお。ばあさんまで厳しい」

「あらまあ、おじいさんたら。厳しくないでしょう？」

「わしはうちが大好きなんだが」

「私もひかりも、貴方が家にいないと淋しいですよ。だから早くよくなってくださいな」
祖母の言葉に、私も頷いて同意する。

「そうか……じゃあ、頑張つて医者言うことを聞くかなあ」

久しぶりに祖父母のやりとりと笑顔を見ることができてほっとする。

「ところでひかり」

「ん？ なに、おじいちゃん」

「仕事は大丈夫か？ わしの見舞いやら検査やらで、無理はしとらんか？」

「大丈夫だよ。うちの職場そういう対応はきちんとしているから、仕事時間を調整してもらえんだ。職場の人も助けてくれるし」

うちの会社は、社長が『家族あつての仕事』という考えの人で、子育てとか介護をする人も働けるような環境作りに力を入れている。だから私も、こうして働けるのだ。

会社によっては、休職を求められたり正社員じゃなくなる可能性だつてあつたかもしれない。祖

父はそれを心配しているのだと思う。

それを説明したら、祖父も安心したようだった。

祖父母が高齢なのもあつて方が一に対応できるように、仕事の融通が多少きいて社員を大事にしてくれる今の会社をリサーチして就職したのは、正解だつたと思う。

「そういえば、わしが倒れた時にひかりを連れて来てくれた人にお礼はしたか？」

不意に祖父に立木君のことを言われ、私は首を横に振る。

「お礼は伝えただけどね。それ以外は、大したことはしてないからつて、受け取ってくれなくて」
職場には菓子折を持っていつて、立木君には別で気を使わない程度のお礼を持っていつた。けれど、彼は絶対に受け取ってくれない。

あまり何度もお礼を押しつけるのも、相手に迷惑になるだろう。こういう時、どうしたらいいのかな。

「それなら、その人が困っている時にそれとなく助けてあげなさい」

「そっか。そうだね、そうする」

形のあるもので受け取ってもらえないなら、それが一番いいのかも。



気付けばあつという間に、新卒の子が入社する時期になった。

うちの部にも二人配属され、それぞれを孝正さんと、立木君が受け持つことになった。本当は私が担当することになっていただけけれど、家庭の事情もあり、急遽立木君に変更されたのだ。だけど……

なんだか立木君の表情が冴えない。それに、よく目が合う。こう、意図的に見られている感じで、何か言いたそうな雰囲気があるのだ。けれど結局何も言わずに目礼して、目を逸らす。そんなことが増えてきた。

もしかして指導がうまくいっていないのかなと思って、私の方から立木君を夕ご飯に誘ってみた。私の気のせいならそれでいいし、断られてもまあ仕方ないかなって気持ちで。

だけど、立木君からはOKの返事がきた。

そして、お店は自分が決めたいと言うので、選択は立木君にお任せした。

立木君が連れていってくれたのは、会社から一駅隣の駅近くにある、洋風居酒屋だった。

席は全て個室で、出入り口は暖簾で仕切られている。明るく落ち着いた室内は、周囲を気にせずゆつくりと食事もお話も楽しめそうだった。

私たちが案内されたのは、二人掛けのテーブル席の個室だ。

「東雲先輩は飲み物どうしますか？」

「んー。久しぶりの外ご飯だから、最初の一杯はお酒にしようかな」

私、酔って記憶をなくすことはないのだけど、チューハイを二杯以上飲むとケラケラ笑って会話にならないのよね。なんだか色んなことが楽しくなって、些細なことですつと笑っていられる。

大事な話をする時は飲酒を控えるようにしているのだけど、素面だと立木君も話し辛いだらうし。それに、一人だけお酒つてなると、遠慮してしまうかもしれないし。

「あんずサワーですか？」

「うん。よく知ってるね」

「飲み会でいつも頼んでましたから」

「あれ、そうだったっけ？」

「そうですよ」

言われて思い返してみると、アルコールを注文する時はだいたいあんずサワーだ。

立木君の観察力と、自分のワンパターンぶりにびっくりだ。けれど、美味しいからつい頼んじゃう。

「そう言う立木君は、安定の生ビール？」

「ええ。絶対、外せません」

立木君は、いつも生ビールだ。あの苦味が美味いらしい。苦いものの美味しさがわかるなんて、私には羨ましい。楽しく食べられるものが増えそうなもの。

そんな話をしながら、二人でメニューを見つつ適当に摘まめそうな料理を注文する。

まずは乾杯して、順に運ばれてきた料理に箸をのばした。

「んー、幸せ」

盛り付けも御洒落で綺麗だし、味も美味しい。それなのにお値段リーズナブルなんて素敵過ぎて、

本題を忘れて食事を楽しんでしまう。

立木君は食べるよりも飲む方がメインみたいで、ジョッキのビールがするすると減っていく。

「東雲先輩は美味しそうにご飯食べますよね」

「だって美味しいもの。職場の近くにこんなおいしい店があるなんて知らなかったよ」

「ここは、少人数でゆっくり話をしながら食事をしたい人向けの店ですから」

職場の人と行くとなると、人数が多くなる。それにこういう落ち着いた雰囲気より、賑やかなお店の方が気楽だから、なかなか選ばないのよね。

「いいお店に連れて来てくれてありがとう」

「気に入ってもらえてよかったです」

少しだけ立木君の表情が緩まって、固かった雰囲気は落ち着いたものになった。

「立木君も、眉間の皺がちよっととれたね」

「俺、そんなに不機嫌な顔でしたか？」

「ううん。悩んで考えているって感じかな。新人指導が始まった頃からだから、指導で悩んだりしているのかなって思ってた」

立木君は少し驚いた顔をした。

「それで俺に声を？」

「要らぬお世話かとも思ったんだけど、気になっちゃって」

「貴女はお人好し過ぎて、どうかと思いますよ」

立木君は手に持っていたジョッキを下ろし、少し視線を伏せた。そして考えるように沈黙した後、小さくため息を漏らす。

「俺、普段から貴女に対してあまりよくない態度だと思っんですが」

心底不思議そうな立木君に、思わず苦笑いする。

同時に、ああ、いつもの立木君だなと、ほっとした。

「立木君には好かれてないかなって思うけど、毛嫌いまではされてないとも思ってるよ？ 本当に嫌いなら、私にコーヒーをくれたり、祖父が倒れた時に病院まで送ってくれたりしないでしょう？」

嫌いなら自分から声をかけて助けたりしないし、わざわざ私の好きなものをくれたりもしないはず。まして、こうして二人で食事なんてことにはならないと思っただよね。

しかもこんないいお店を選んだりもしないと思うし。

「こうして食事に誘っても、立木君は嫌ならずばっと断るでしょう？」

「そうですね。でも、貴女に悪意があつて誘いに応じた可能性があるとは思わないんですか？」

「えっ!? 何か悪巧みでもしていたの？」

「していませんよ」

「ならいいんじゃない？」

ああよかった、なんて思ってたのに、立木君は机に肘をついて頭を抱える。

「よくないですよ……貴女は人の悪意に無頓着過ぎます。もうちよっと警戒心を持ってください。

貴女みたいなお人好しは、詐欺師の格好の標的ですよ」

確かに、そういう人に街中で話しかけられることは多いかもしれない。けれど会話中にその気配を感じたら、問題なく対処できる。あしらい方を仕事でも習っているし。だけど……立木君はそう思っていないみたい。

指摘してくれるくらいには、気にかけてくれている……なんて思ったら自惚れかなあ。

「注意してくれてありがとう、気をつけるね。それで、立木君は何を悩んでいるの？」

「だから、そういうところが……」

顔を上げた立木君は不機嫌そうな顔で私を見た後、言いかけた言葉を止めた。

どうしたのだろうかと首を傾げれば、立木君はビールジョッキを掴んで、三分の一くらい残っていたビールを一気に飲み干した。

「もういいです。貴女を利用してやります。後で文句を言われても聞きません」

「いいよ。その勢いでドーンと言って」

利用してやる、なんて言いながらも、立木君は困ったような顔をしてしばらくためらっていた。

仕事外で話をする、彼は表情がとてもわかりやすい。仕事中は意識しているのか、全くそういうことはないのだけど。こうした場だと、ちよつと捻くれた感じのことは言うけれど、表情が気持ちを表現している、今も立木君が悪いことを考えてる、なんて疑う気持ちには全くならない。とりあえず立木君の新しいビールと自分用のソフトドリンクをオーダーし、改めて話しかける。

「そんなに困るなら、言わなくてもいいよ？」

「……やっぱ無理です」

そう言って、立木君は突然立ち上がった。

「今まで失礼な態度をとって、申し訳ありませんでした」

そして立木君は、綺麗な謝罪の礼をした。

「た、立木君!？」

「あんな態度をとっておいて言えたことではないですが、別に先輩が嫌いになつたわけじゃないです。ただあの時は……尊敬している先輩が俺の嫌いな人と付き合うって知って、すごく苛々して。東雲先輩が井坂さんにずっと片想いしていたのも知っていたのに、素直に祝福できませんでした。それに付き合いだしてから、俺が先輩に近付くと井坂さんの機嫌が悪くなって、先輩に当たりがきつくなるのも見てわかってましたし。それで聞きたいことがあつても先輩に話しかけ辛くて、余計に井坂さんに腹が立って嫌いになるし。意地の悪い井坂さんにも俺にもニコニコしている鈍感な先輩がもどかしくて……気付いたら先輩と距離を取って、話をしても失礼な口をきいていました。……子供みたいな真似をして、すみませんでした」

頭をずっと下げたまま、そう言葉を紡ぐ。そんな立木君に、なんだか自分の方が申し訳なくなつた。

立木君の態度は、そこまで悪かつたわけじゃないのに。

ちよつと毒舌かなとは思うけど、心を深く抉るような暴言をはかれたことは一度もない。私を遠ざけるような感じで態度もそつけないながらも、仕事に関しては適切な距離感で接していた。だから、業務に支障が出ることもなかった。

きつと、井坂さんと折り合いが悪い立木君からしたら、井坂さんと付き合い始めた私とは関わり辛いし、どういう態度で接したらいいか困っていたのだろう。

「うん、いいよ。もう気にしないで」

立木君が勢いよく顔を上げる。

驚きと困惑が入りまじった、そんな複雑な表情で彼は私を見た。

この一年、私を警戒するような厳しい表情の立木君を見ることが多かった。だから、こんな風な表情がころころ変わっていく彼を見て、私は自分の頬が緩むのを止められない。

「なんで……なんでそんなあっさり」

「まず座ろうか。店員さん来たら変な顔すると思うよ？」

立木君は頷いてから、椅子に腰を下ろした。

安堵したようにも見える立木君に、私も少しほっとする。

「私は二人の折り合いが悪いことも知っていたけど、自分の気持ちを優先させて井坂さんと付き合ったの。だから、立木君に嫌われるのも覚悟の上だった。だから気にしなくていいよ」

「……先輩と同じ状況で好きな人に告白されたら、俺だってOKします。浮かれて、俺の彼女だって公言して、人目もはばからずイチャイチャしますよ。後輩？ 知ったことじゃありません。自分の幸せを優先します。先輩は悪くないです」

立木君の意外な返答に驚いた。

「立木君の恋愛は、意外に情熱的だね」

「……そうですね？」

「立木君はあまり自分のことを曝け出したり、自慢したりしないから、職場の人とかには公言しないで、静かに愛を育みそうかなって」

「俺も男ですからね。好きな人を周りに自慢したくなりますよ」

「そっか」

「そうだよね。好きな人は自慢したくなるよね。」

「それに浮気なんてしません。好きな相手だけ大事にします。そういう男は世の中にたくさんいます……だから貴女も、次の恋を探せばいいんです。これまで酷い態度をとっていたので信憑性ないと思いますけど、俺は先輩が笑ってる方が好きです」

真っ直ぐに私を見て告げる立木君の表情が男の人を意識させて、思わずドキッとします。

立木君は、失恋した私を気にして励ましてくれていただけに。

「先輩？」

「あ、そうだよね。いい人はたくさんいるよね。ありがとう」

今はまだそんな気分にはなれないけど、次は浮気をしない人を見つけてよう。

なんて思っていた時、不意にあることが頭に浮かんだ。

「あっ！ 立木君、今彼女いる？ いたら、先輩とはいえ女と二人でご飯なんて嫌だよ」

「勝手に誘ってごめん」

「いえ、彼女はいませんけど」